

高松塚古墳出土木棺の修理

美術工芸研究室・平城宮跡発掘調査部

昭和47年3月に壁画が発見された高松塚古墳からは銅鏡、金具類などが伴出しており、これらは昭和49年に一括して重要文化財に指定されている。このうち埋葬者を納めた漆塗の木棺の断片は出土時の状態のまま当研究所に保管されていたが、特に木地の部分の朽損が著しく、漆部を含めて脆弱化が進行しているため、昭和52・53年の兩年度にわたる修理が計画された。美術工芸研究室・平城宮跡発掘調査部が中心となり、修理の施行を担当する財団法人美術院の協力を得て修理のための調査が行われ、これと並行して文化庁美術工芸課、東京国立文化財研究所の係官を招いて修理方針立案のための検討会を二度にわたり開催し、その結果にもとづいて修理に着手することとした。

木棺の概要 高（現状）約25cm、幅約58cm、長約210cm。杉材製、黒漆塗、外面金箔押、内面朱塗。

蓋が欠失する木棺の身の一部分で、身の原形は底面、各側面共それぞれ一枚であったと考えられる。側面材は底面材の上に漆で接合し、さらに断面方形の銅釘で左右は各5ヶ所、前後は各2ヶ所を底面から打って留める。側面材前後分は外側へ僅かなふくらみをみせ、蓋及び身の上縁部が欠失しているため、身の口縁部の状態、高さ等は不明である。表面の仕上げは錆下地に布貼（麻）を施して黒漆塗とし、外面はさらに金箔を押し、内面は朱塗とする。杉材の厚さは1.4～1.6cm、錆下地を含む漆部の厚さは0.2cm弱。

損傷状況 出土時の状態、即ち湿度100%にあり、石室内の泥や植物の根などが付着したままである。木部は朽損が著しく、銅釘を中心とした部分等に残存するのみで、大半は亡失し、残存する部分も殆んど脆弱化している。漆部は底面と側面とに分れ、底面は内外の約8割、側面は西側内外の約3割程度が残存する。内外面はそれぞれ遊離して4層に折重なった状態にあり、各面共数片（底内面6片、同外面10片、側内面4片、同外面12片）に大きく分れ、さらに小断片が多数残存する（これらの殆んどは原位置が確認できる）。内面の朱は剥落した部分も多いが底

面に比較的多く残り、一応の接着力が保たれている。外面の金箔は底面に点在するのみで、接着力を殆んど失っている。なお、金銅製の透飾金具（1箇）、円形飾金具（6箇）、六花文座金具（2箇）などの伴出品は木棺の付属品であるが、原位置については現状では確認できない。

修理 ①断片に分れた各層の漆部を側面外側から各層毎に順次取り外し、付着している泥等を洗い落とし、原位置を確認した上で歪曲を直すためプラスチック板19枚に分けて挟んだ。なお、この作業中、最下層（底面外側）の北方の約4ヶ所に金箔が残存していることが確認された。箔はいずれも小片で、最大のもので径3cm程であるが、残存状況から外側の全面に施されていたものと推測される。残存する箔は接着力を殆んど失っているため、特に漆部から完全に遊離している分について、原位置を確認した上で和紙に移し取った。プラスチック板に挟んだ漆部は水抜作業を行うまでの間水槽内に入れ、現在の湿度の状態を保つこととした（作業は8月15日—9月21日の間に行なった）。

②漆部の水分を除去するための含浸処理槽は内外装共ステンレススチール（SUS403）製で、内外装の間に4.6mmの断熱材を挟み、更に内壁に3.8mmの空間を設け、冷温水を循環させ、槽内の温度の調節が可能となるように設計した。処理槽の有効内寸法は長1150mm、幅700mm、高300mmで、漆部断片中の最大のものに合せた。なお、この処理槽は平城宮跡発掘調査部第三収蔵庫内に設置した（3月31日完成）。

③53年度には当研究所において処理槽を用いて漆部の水抜作業を行い、乾燥させた後、施工場所を京都国立博物館に移し、財団法人美術院によって修理を行う予定である。（田中 義恭）

口絵・平城宮出土木簡積文
(上段)

「志摩国志摩郡道後里戸主證直猪手戸口
同身麻呂御調海松六斤」
〔返前國鹿森原〕
〔返前子戸主大神部宿奈戸同発太調三斗〕

(表) 〔供 御所請佐良一六口籠尻佐良料〕
〔判充大進小折 正月廿日〕
〔付物部山成 高橋田張麻呂〕

(裏) 〔丹波国多紀郡真継里
多紀臣大足三斗 并一俵和銅五年〕
〔次金村三斗〕

(下段)

〔木工并仕丁粮〕
〔奄知 様進〕
〔肆斤〕
〔土野里鉸十口〕